

令和7年度（2025年度）第2回 北海道環境パートナーシップオフィス運営協議会 議事要旨

日 時 令和8年2月17日（火）9:30～12:20

場 所 札幌市環境プラザ環境研修室

（札幌市北区北8条西3丁目札幌エルプラザ2階）

出席者 資料参照

1. 開会挨拶

○環境省北海道地方環境事務所環境対策課 西野雄一次長

お忙しい中お集まりいただき感謝する。今年度2回目の運営協議会ということで、今年度の事業の進捗状況や取組状況を主に事務局から説明させていただく。スタッフの尽力で概ね計画通りと思われるが、ぜひ来年度以降の活動の目標も含め色々ご助言いただきたい。限られた時間ではあるが忌憚のない意見を頂きたい、よろしくお願ひしたい。

2. 運営協議会委員及び出席者紹介（説明省略）

以下、議長により議事進行を行った。

3. 令和7年度事業計画の説明及び質疑

（1）第7期活動目標・事業構成の確認、事業群1について（説明省略）

事務局（宇山生朗）より説明し、質疑応答・意見交換を行った。

○長谷川理委員

気候変動対策と自然再興の両立に関して、昨年までは自然再興や生態系への影響といったものが見えてきた気がしていたが、どのあたりが自然再興の部分との両立を目指していたのか。

○事務局（宇山）

具体例として、釧路で実施した「自然と再エネの共生に関する場づくり」では、起点は再エネ開発である一方、出口を「自然を守るための共生ルールの策定」に置いて設計した。

また、支援体制に関する研究会についても、生物多様性保全を進めるための支援体制をどのように構築するかという観点を軸に議論している。加えて、自然再興の取組は事業群1に限らず、事業群2で生物多様性保全に力点を置いている。道内で生物多様性保全を進めるプラットフォーム形成に向けた検討会を企画・推進しているほか、苫小牧で自然共生サイトと

地域戦略の接続を意図した意見交換会等、生物多様性を前進させる取組も一定程度進めている。

○長谷川委員

生物多様性の話が全体的にないということではなく、具体的に再エネの導入と生物多様性保全との両立となっているのか。今年度は釧路湿原においてピンポイントに軋轢があり、太陽光などの優遇がなくなるなど再エネの導入に対する弊害となったのではないかと。まさに今年度は生態系への影響をより具体的に取上げないと両立の話にはならないのではないかと。

○事務局（宇山）

コンフリクトがより顕在化している領域に踏み込むべき、というご指摘は同意する。

一方で、当方としても当該地域の関係者にアプローチし、ステークホルダーとの議論の場の設定を調整してきたが、結果として実行には至らなかった。そのため、釧路町において、ゾーニングや再エネ推進の立場の関係者が一定数存在する状況を踏まえ、まず釧路町側で対話の場を開催し、そこに釧路湿原一体のステークホルダーも巻き込みながら、両立を図る動きを形成する方針とした。

実際に、釧路町では、自然を守るための共生ルールの策定について、地域主導で継続的な対話の場が開催されている。近隣の行政関係者や自然保護に関わる主体の参加も生まれつつあり、今後は地域一体となった連携の動きへ発展することを期待している。

○長谷川委員

影響がもっと他にも広がってきており根室、別海、中標津等で再エネのハレーションが起きている。釧路市に特化せず、地域が必要としているものをトピックとして扱っていただきたい。

○阿部隆之委員

情報の発信について、評価指標に WEB アクセス数やメルマガの登録数があるが、ICT の活用が広がっている中で WEB にアクセスすることは少ない。WEB は確実な情報をお確かめに行くという役割になっており、その件数を上げたり維持したりする労力は不要ではないか。情報をより発信するには SNS の活用が出てくる。従来の指標にこだわり過ぎず、新たな取組を柔軟に始めながら SNS での発信に力を入れることで広く理解を進めることができるのではないかと。

○吉中議長

達成目標あるいは成果指標は第7期で決まり事業群ごとの立て付けも決まっているが、途中で必要に応じてより効率的に進めていくためにどうすればいいのか検討が必要、貴重な意見に感謝する。

○小林ユミ委員

中間支援の研究会に参加し、どのように地域のためになるようにしていくかという視点で情報提供をしてきた。道内の取組を行っている方々と一堂に会するのは有意義であった。その中でも目指すべき地域脱炭素のイメージを共有するでは、新たな気づきがあった。この研究会で最終的な結論を出すのは難しいと思われるが、それぞれで行っていることが上手くネットワークしていけばよいと思う。地域の状況に合わせて、計画策定後、どのようにつないでいくか各地の中間支援のつながりを作れて有意義であった。

エネルギー貧困に関して、前年度から議論の場がつながっている点がとてもよいことだと思う。一般に、普及啓発や情報発信はその後にどう受け取られて活用されたのかあまり見えないので、よい取組なのではないか。

再エネに関しては野生生物、生活環境などどうしても地域の中で軋轢が生まれる。大きな反響があった釧路湿原だが、それにより道内で地域を見つめなおし、ガイドラインや条例が広がっている。それ自体は否定するものではないが、過度な規制はこの先、地域での取組の不安になるのではと気になる。省エネ・新エネ大賞で奨励賞をとった北海道ワインは、太陽光パネルを設置している。ガイドラインでは地域の取組を重視する部分も出てくるかもしれないが、こうした地元の企業や農家の取組が阻害されないような形で、地域の中での再エネ普及の方策を探していかなければならない。軋轢が表面化する前に何とかしようという動きもあるが、うまく支援できるとよい。

(3) 事業群2について（説明省略）

事務局（溝渕清彦）より事業群2について説明し、質疑応答・意見交換を行った。

○長谷川委員

地域に拠点を作り伴走支援を一緒にしているが、どういった支援が役に立つのか参考までに教えてほしい。一つとして、活動を持続させるために助成金や交付金、クラウドファンディング等の活用のための支援、ファンドレイジングがあるが、知識や経験があまりあるわけではなく、支援する我々がまず理解しなければと思っている。先ほど SNS の話があったが、EPO 北海道は普及啓発に関して LINE や TikTok は使わないのか。マンパワーの問題か、ツールの制約はあるのか。

○事務局（宇山）

SNS の活用について、特段の規制や制度上の制約があるわけではない。一方で、相談対応と情報発信は EPO 北海道のコア業務であり、これらを拡充し過ぎると、事業群2・3等のプロジェクト型業務に割くりリソースが不足するというジレンマがある。

今後、より有効な普及啓発・資金獲得支援の手法については幅広く検討していきたい。委員の皆様からも有効な手法や工夫についてご意見をいただき、運用に反映させたい。

○事務局（溝渕）

広報・普及啓発等については、スタッフ個人が媒体になっていることが多い。相談対応に

についても、それぞれの属性やネットワークに基づいて相談を受けることが多いので、ターゲットを細分化して複数の SNS を展開するよりも、個々の強みを生かす戦略になっている。

資金調達についても同様で、個別対応となっている。共生圏事業の参加団体は、それぞれ助成金を獲得してきた実績もあり、地域循環共生圏だからこそ、環境だけではなく地域づくり等、別分野からも資金調達できる可能性がある。こちらで広く情報収集しつつ、参加団体と検討している。もちろん簡単なものではない。

○長谷川委員

我々もそれを必要としている。以前、きたネットが助成金セミナーを市民団体向けに行っており、今であればクライドファンディングや自然共生サイトも企業マッチングが期待できるかもしれないが、自分たちでサポートしてくれる企業をどう見つけ出せるかということを考えていただきたい。

○事務局（宇山）

ファンドレイジング支援に関しては、具体例として、日本ファンドレイジング協会認定のファンドレイザーと交流する機会を設け、知見の収集・接続を進めている。

また、エネルギー貧困に関する勉強会等では、ファンドレイジングの専門性を有する人材に参画いただき、成果の可視化や投資プロセスの設計といった観点を取り入れている。こうした取組や外部知見の接続については、現状、外部に十分共有できていない面があるため、今後は可能な範囲で可視化・発信を強化する必要があると認識している。併せて、助成金等の資金環境も変化していることから、資金調達・支援のあり方自体を「公正な移行」の観点も踏まえて整理し、検討を深めていきたい。

○小泉雅弘委員

公正な移行は非常に重要である。全体的に思うところだが、一番弱いところにひずみが出ないことが一番の原則となる。誰の意見を聞くのか、だれと対話をするかが重要である。市民運動をしている人は見えている景色が違うと感じる。再エネや原発の再稼働など、エネルギーの話は難しいが住民・市民レベルの対話が絶対的に必要である。EPO は公的機関の中でもそういう所に接近できる近さがあるのではないか。企業や事業者も重要だが、基本は市民や住民なのではないか。当事者性が重要だと日ごろの活動をしていて思っているのでマイノリティから見てどうなのかを何にしても意識してもらえるとよい。

(4) 事業群 3・4 について（説明省略）

事務局（久保田学）より事業群 3・4 について説明し、質疑応答・意見交換を行った。

○大津和子委員

前回この会議で気候変動教育のアプローチについて議論した。アドバイザーに気候変動教育分野の方が加わったことはよいと思う。学校で先生方を対象にしてという派遣はなかなか広まらないので、広く環境に関するような様々な分野のテーマを取り上げて話せるメンバーがもう少し増えてもよいのではないか。

「動物園で考える地球環境の未来」のチラシを見るととても魅力的でよいと思ったが、それぞれの参加数や参加層はどのようなものか。

○事務局（久保田）

参加者は多様であり、一回目のコーヒーであれば動物園の関心層ではないコーヒーに関心がある方々の参加があった。実際にサステナブルなコーヒーを仕入れてカフェをやっている方が来てくださるなど、新たな接点として機能した。

○大津委員

もう少し広報できれば参加者が広がりそうな魅力的な企画なのではないか。動物園と企業とのコラボもできるというのも強みである。高校生の総合的な探究の一つの学びの場としても使われそうであり、小・中学校の総合的な学習でもこういうことに関心を持つ児童・生徒も多いのではないか。このような情報が学校に届くようにするにはどうしたらいいか考えている。情報が届けば大いに関心を持ってもらえる可能性がある。

○事務局（久保田）

人数については、プログラムに園内見学を含み、飼育員に動物の生態解説をしていただくことから人数を増やせず初めから定員を絞っていた。仰る通り、このような取組を実施する拠点施設を接点として、学校に関心をもってもらうことは高校へのアプローチとしてぜひ生かしていきたいと考えている。

○事務局（宇山）

動物園の改装があった関係で広い会場がなく、より小規模にせざるを得なかった点を補足したい。

○小林委員

コーヒーの回に参加した。小学校でチョコレートと環境の話をするたびびっくりして子供が身を乗り出すことがあるので、コーヒーではどのような感じかと参加した。コーヒーやチョコレートには気候変動だけではなく色々な複雑な要因があるが、聞いたことをどう自分の活動に活かそうかということと、参加していない人に動物園がどう伝えていくかということ、うまく広がるようになったらよいと思う。

何年前かに北海道らしい気候変動教育の教材を作る話があった。教科書通りの教育では北海道は季節や自然が異なることもあり、よくわからないことがある。子どもの時に見たり聞いたり体験したりしたことが大人になった時につながってくるのではないか。動物園とのつながりもそうだが、低学年との気候教育との関わりを続けていけるとよい。

○事務局（久保田）

動物園でのプログラムの場になかった人にどう伝えていくかは我々も関心がある。動物園のショップやカフェで伝えることができるのではという可能性は議論している。具体的には実現していないが、もう少し続けて定着させていく努力が必要。北海道らしい教材につい

ては先日、北海道内で気候変動教育を実践している先生方が集まるフォーラムをNPO 法人 当別エコロジカルコミュニティーが開催した。そこでのやりとりから、「ミステリー」という気候変動教育プログラムの北海道版を高校の先生と一緒に考えられないかというような案を考えはじめたところ。

○大津委員

学校への訪問・ヒアリングではどういう方にヒアリングをして、その結果どういうアイデア・課題が見えてきたのか。

○事務局（久保田）

学校により、管理職や探究学習の担当教員等様々であった。羅臼高校は探究学習で気候変動教育を真正面から組んでいて、担当の先生がかなり努力をされている。知床地区のユネスコスクール登録高校で話をお聞きして、学校内での気候変動教育の意義に関する共通理解が共通課題であることがわかった。新たな実践は一教員の発意では難しく、公的な教員研修の機会等に関する期待が共通して寄せられていた。

○長谷川委員

円山動物園以外の動物園・水族館との連携の可能性について、環境省への提案になるが、環境省がシマフクロウ、オジロワシ、オオワシやタンチョウに関する取組で動物園との連携も進めており、いい素材・コンテンツを持っている。研究者と動物園をつなぐときにEPOに入ってもらえるなど考えられるのでは。ぜひ環境省が持っているものを環境省の活動のアピールに使っていただきたい。高校教育に関しても同じことで、環境省の保護官事務所などは現場で話ができる人がいるので、ぜひタイアップしていただきたい。

○環境省（西野次長）

仰る通りでEPOの事業でもここ数年自然系の部局と連携を深めている。野生生物でも連携できることはあると思われる。事務所内部署横断で連携していくことは追及していきたいと考えている。

○阿部委員

企業との連携が興味深い。農業系・食品に関することで気候変動に関心を持っている企業もあるので広げていただきたい。

地域ESD推進拠点について話を聞きたい。どのくらいの数が増え、どのような取組がなされているのか。

○事務局（久保田）

北海道内は23件に増えた。全国では214件登録されている。全国では動物園や水族館等もあり官民間わずさまざまな拠点がある。北海道の場合は道立・国立の宿泊研修施設、ジオ

パークと関りがある地域づくりとつながっている拠点、そして環境系の施設や活動団体等に大別される。「合同会社エゾリンク」は北大の生態系の研究者が作った企業で、気候変動教育のプログラムを開発して実践をしている。「北海道エコビレッジ推進プロジェクト」は環境だけでないサステナビリティな暮らし、コミュニティづくりを地域の中で実践している。「チトセコ」は千歳を拠点に環境教育を様々な形で実施している。アクティブな組織が近年は参加してくれている。

○阿部委員

その上で推進拠点の意識が薄れているところもあるのではないかと。ポスターやシンボルを掲示してもらい、施設の職員に自覚を促すことやESDに関する相談を受けてもらうなど、見える化していく事を1つの取組として検討できないか。こういった制度はどうしても形骸化してしまうこともあるので地区レベルのネットワークを繋げるとよい。

○事務局（久保田）

全国的な制度としての特典としてはESD推進ネットワークのロゴの使用があるが、あまり使われておらず検討が必要。

○小泉委員

地域ESD拠点について、さっぽろ自由学校「遊」も登録したが、正直ESD拠点として活動している自覚はなく、団体のメリットもあまりなく、隠れ拠点のようになっている。拠点になったからには、自分たちの姿勢も含めてもう少し積極的な部分があるとよいと思う。拠点に期待していること、拠点としてできる事、一緒にやりたいことなどあるのか。

○事務局（久保田）

全国共通の課題だが、ESD拠点の登録自体はあまりメリットがない。任意の登録の仕組みなので、メリットというよりは、それをどううまく使っていただけるかがポイントとなる。ESDセンターとしては、パートナーとして一緒に組んで何かできるとよいと思う。以前メジャーグループと一緒に組んだことがまさに一つの形だと考えている。我々の事業テーマと重なる部分については、一緒に動いていただくことで何かを作っていくことを目指している。

○事務局（溝淵）

小泉委員への質問になるが、2027年度から本格的にSDGsの見直しが始まると思うが、それに向けた市民セクターの動きがあれば教えていただきたい。

○小泉委員

全体像はわからないがSDGsと市民社会ネットワークに関わっている。その中で一つとして目標年となる2030年で評価をしようという話は出ている。SDGsの名前が一気に広まっ

たこともあり、今は打ち出すところが減り、注目度も落ちているなかで改めてその本質、サステナビリティとはどのようなことなのかというところに立ち返り見つめていく事が重要だと感じている。もし 2030 年に向けて一緒にできる事があれば取組たい。

5. 全体を通じた意見交換

○長谷川委員

去年までに北海道生物多様性保全計画の改定に関するウェビナーを実施していたと思うが、あれはどの事業群か。

○事務局（溝渕）

生物多様性地域戦略やネイチャーポジティブの推進については、事業群 2 の一部で行っている。個別の話題ではなく、政策を地域に根差して進めていくために中間支援機能をどう設計するかという点は、事業群 1 に引き継がれている。

○長谷川委員

地域戦略の中でも生物多様性保全を進める上では中間支援が必要だと考え、自身も発信してきたが、本当に効果があるのかと思い始めている。作って終わりではなく、その後のフォローをやってほしい。石狩市でも地域戦略を作ったが、計画ができたことで変わったこと、他の市町村に作ってほしいという価値が見えない。市民や道民に伝えていく目的も踏まえて続けてほしい。

○事務局（宇山）

生物多様性に関する「ダイアログ（対話・支援）」の継続については、大きく 2 点の整理で進めている。第一に、地域ごとの個別支援は事業群 2 に位置づけ、現在は苫小牧市を起点に具体的な動きを進めている。第二に、仕組みづくりなどの「全体最適」に関わる論点は事業群 1 で引き継ぎ、地域戦略が“作りっぱなし”にならないための支援の型・ネットワークのあり方を検討している。

個別支援では、苫小牧市の地域戦略を契機として、横のネットワークを形成しながら実践を進めるため、自然共生サイト等の手段も活用しつつ、民間と行政のネットワーク育成を進めている。

○事務局（久保田）

ご指摘の点は非常に重要だと考えている。脱炭素の方では議論が進んでいるが、計画策定はもちろん重要だが、その進行管理が重要だということは意識している。生物多様性は認知さえされていない。形骸化している話もあるが、活用するサポートも必要だという認識が前提にあり、設計していく中で強く意識していきたい。

○鈴木昭徳委員

様々な取組個別に対しては素晴らしいと思うが、一言で言うともったいない。どんなに素晴らしいことをしていてもその場に 20~30 人しかいない。集まるのはすでに環境に意識を持っている人やすでに動いている人、自分で学んで行動できる人である。つなぐという機能をより強化してはどうか。環境に特化したハブとしての機能がよりあるといいのではないか。環境の担当者として着任すると、属人的な業務となるので自分で学ばなければならない。企業で人材育成まではできていない中で、環境担当者に対する基礎教育をしていき、そこでネットワークを作っていくと相乗効果になるのではないか。

○吉中議長

来年度は第 7 期の最終年度であり、その次の第 8 期に向けて考えていく時期となるが、次期について考えていることがあればお聞かせ願いたい。広範な事業を展開しているのだからこれからどうしていくのかを真剣に考えた方がよいのではないか。EPO 北海道や ESD 活動支援センター、そして運営団体としての環境財団があるが、一般の人がわかりやすい形とはどのようなものか考えている。つなぐというところを重視したプラットフォームがあるとよいのではないか。いろいろな面でバラバラ感があるのでどうしたらよいのか。

○事務局（宇山）

属人的な馬力でこなしており、中間支援のリソースを増やしていかなければ処理しきれない。イメージとしては各地点にサテライトのようなものがあるのを目指していく。具体的な参加属性がわかりにくいことについて、情報の公開性が薄いことが見えているので、できるだけ議論の素材になるように開示していきたい。

○環境省（高玉正二課長補佐）

令和 8 年度事業を EPO と相談しつつ検討を進めているが、ESD センターに関して令和 9 年度より学校教育の中でも高等学校に対してユネスコスクールを中心とした気候変動教育の普及が強く言われている。全国の会議でも今のままでは予算が難しく、どのようにしていくか検討しなければならないタイミングとなっている。いろいろと教えていただきたく、今以上にご指導ご鞭撻いただきたい。

○事務局（溝渕）

特にコロナ下では、打ち合わせやセミナーのオンライン化が求められた。今後は AI の活用がさらに急速に進むと思われる。来年度も AI の活用について知見を高めていけるとよい。

○鈴木委員

少ない人員で回さなければならないところで、個別団体の支援から全体の底上げにシフトしていくのかと思われた。そちらの方が求められているのではないか。

○吉中議長

予算の話もあったが、事業群で分けて説明いただいた中に環境省の予算の部分が入っていたり、ESD では文科省、あるいは北海道庁のものがあつたりと、色々なものに応じて事業を展開しているため、縦割りになっていて見にくい。北海道でそれを踏襲する必要はないのではないか。これから HoBiCC や新たな増進センターとしてやろうとしていくところで、どう仕分けていくのか。横串役となっていく必要があるのではないか。今回の運営協議会で議論すべきことか環境財団で考えてもらうことかわからないが、メンバーが重なっているので、いろいろところで考えていきたい。

○環境省（西野次長）

今仰られたことは EPO 事業としてはある程度、事業ごとにまとめていかないといけないところはあるが、全体としての見せ方はあると思う。北海道全体の動きを表現していくというのは必要だと考えている。

○石本忠司委員

精力的に活動していると感じた。これまでの普及啓発からどう地域に入っていくか、地域との連携ということでアプローチの仕方が道庁としても難しいと感じている。できれば対話の場など一緒にできる場所があれば入っていききたい。ポスト SDGs に向けてよろしく願います。

5. その他連絡事項

○事務局（荒井由美）

協議に感謝する。議事要旨を後日確認させていただくため、委員の皆さまにご協力をお願いする。その後 EPO 北海道 Web サイトに公開する。発言者のお名前を記載させていただく。

6. 閉会挨拶

○事務局（内山到）

長時間にわたるご議論にお礼申し上げます。議長より環境財団を交えたわかりやすい事業建ての宿題もいただいたが、日ごろから課題と感じている。気候変動教育一つとっても環境財団の温暖化防止活動推進センターという肩書を持っており、EPO で行っている自然環境と自然エネルギーの両立についても HoBiCC というものがある。その他、様々なセンターや委員会に所属しており、線引きが難しいところもあるが、EPO はより先を見てやっていく、つなぐというところ、結果として地域に何をもたらすかということが重要だと思い立ち上げた。来年締めくくりの年で評価が気になるころではあるが、その次に向けてもそういった視点で関わっていければと考えている。来年度もどうぞよろしくお願い申し上げます。

以上